

特集

病院経営のプロをどう養成するか

病院を取り巻く環境は厳しさを増しており、経営のプロである管理者が求められている。これに対して日本を代表する歴史のある経営者養成機関はどう対応し、これまでの実績をどう評価しているのか。MBA コースとして日本で最も伝統のある慶應義塾と、戦後まもなく設置された病院管理研修所から伝統を引き継ぐ国立保健医療科学院の先生にそれぞれ執筆いただいた。

また、これらの機関を含めて経営学について系統的に学んだ者は、病院経営の実務のなかで、自ら受けた教育をどう評価し、どう役立てているか。MBA、MPH および国立保健医療科学院の各コースの履修者からそれぞれ体験を述べていただいた。

ところで、経営は医学以上に Art であり、Science でないと言われている。そうであるなら、管理者としての技能は、外部の養成機関で学ぶよりも、実務を通じて組織の中で修得したほうがよい、という考え方が特に日本において支配的である。そこで、こうした考え方に従って、院内で経営のプロを養成する、あるいは一般企業から経営感覚を身につけた者を病院に迎え入れることで、どのような成果をあげてきたか。大学医学部附属病院と企業立病院における取り組みを紹介いただいた。

一方、若年人口の減少と高等教育のニーズの高まりの相乗効果により大学院の数は急速に増えており、こうした背景で医療経営の大学院も次々に開校している。各大学院はそれぞれどのような理念の下にカリキュラムを作成し、それに基づいて、どのような背景を持つ者を入学させ、どのような分野に卒業生を送っているのか。日本の病院の大部分は同族経営の中小零細組織であるなかで、大学院卒の経営のプロが活躍する場はあるか。4つのそれぞれ特徴のある大学院から報告をお願いした。

最後に、アメリカでは MBA が毎年 1 万 2 千人誕生し、MBA の取得が経営者になるための登竜門であり、医療分野においても MBA の取得は病院の CEO になるために有利な条件となっている。こうした観点からアメリカで有数の MBA コースとして、毎年 850 人の MBA を送り出しているペンシルベニア大学のビジネススクールである Wharton 校における医療経営専修のプログラムを紹介した。

(池上 直己)